



#チルした大人たち



一般的に言われる居場所というのは閉鎖的空間になっていることが多いですが、屋外だからこそ人の声が反響しないのでプライベート空間が保たれる、だけど孤独感を感じない絶妙なバランスがありました。

自然な風を楽しめる、とっても気持ちのいい空間だったよね。

それに、テレビ塔広場は人通りが多く、芝生でくつろいでいる人もいる場所だからこそ一人でいても気にならない空間になっていました。

(これからについて)不定期でもいいから継続的なものができればいいかな。もともとの目的だった、10～20代の相談できる場所というニーズに合ったものがやりたい。今回みたいに継続開催すると、期間中に何日も来てくれる方もいる嬉しさがある一方で、クローズスペースでは新しい子の入りにくさに繋がります。これがオープンスペースでどうなるかを、楽しいイベント感というのは残しつつ、考えていきたいです。

あとは、他の事業所や団体とも繋がれたり、街づくりの一環やその後の活動のキッカケになっていくといいと思います。

観光客の方も結構いて、「名古屋、いい所ですね!」って言ってくれる人も結構いたんですよ。

(大山娃里)

開催中、たまたま僕が話をさせてもらった男の子がいて、その子の話を聞きながら自分の過去の話なんかもして。『強さ』について一緒に考えました。

その子はこの場所にきたことを否定した親に対し、自分の気持ちをぶつけることができたみたいです。最終日に手紙を持ってきてくれました。相談所と言われる場所には行き辛いけど、フリースペースのような出入り自由で別に大人と話をしなくてもいい空間が結果的に行きやすく、話しやすいんじゃないかな。

ただただ、くつろいで「明日からも仕事がんばろっ」こんな言葉も素敵でした。

今まで関わってきた居場所とは考え方や在り方が大きく異なるように感じます。だからこそ大きな可能性を持った居場所になるんじゃないかと。ある意味、めちゃくちゃ無責任。利用者は不特定多数で記録もつけない、その日以降、会わないかもしれない、だからこそ気軽さがある。あの場所をきっかけに支援機関を紹介するのではなく、ただ、安心できる場所であることが大切なかもしれません。

ただ、様々な事情があつて帰りたくない、帰れないという場合も十分に考えられるので、私たちは地域の社会資源の中でチルの後の時間を対応してくれる場所を探すことやその場所との関係を大切にすることが必要だと感じます。

雰囲気はあのままで、できることをどんどん増やしていけるといいですね。

(井口泰雄)



「新学期始まっちゃうな～」

「ウチら貴重な休みに何してた?笑」

みんな一度は思ったことがあるのではないのでしょうか。

久屋大通公園、テレビ塔の下にできたフリースペース「#久屋でチルする?」

大人も子どもも、キャンプチェアに腰掛けてChill outしてみませんか?



ライトアップされたテレビ塔を眺めるもよし

ほんのり秋の訪れを感じさせる風を楽しむよし

話したいことがあれば、聴かせてね。

#久屋でチルする?とは

不安な気持ちが高まる夏休みの終わりにから新学期の始めにかけて、夜の時間帯(午後6時から午後9時まで)に子ども・若者が気軽に立ち寄れるフリースペースを期間限定(2022/8/29～9/8)で久屋大通公園テレビターヒロバにて開設。芝生の上やキャンプチェアに座りながら、参加した子ども・若者同士で話をしたり、現場のスタッフと何気ない話をするなど楽しい時間を過ごしてもらうとともに、悩みのある子ども・若者に対しては相談に乗り、本人の希望に応じて必要な機関等の紹介をする。

「チル」とは「Chill out」のことで、「ゆったりする、ゆったりする」などの意味があり、若者の間でよく使われている。

#久屋でチルする?

子ども青少年局 青少年家庭課

「#久屋でチルする？」

名前の無かったこの企画の名付け親は名古屋市の担当職員である浅沼さんだった。

失礼な言い方だが、「名古屋らしくない」ネーミングセンスがとても素敵だと思った。

結果としてこの名の元に9日間で591名の人が集ってくれた。人数ではない、とわかっているがこの数字の大きさがこの取り組みの意義の強さを証明してくれたように感じた。

「支援」や「相談」ということを前面に出さない今回の取り組みは、私たちにとても初めてのことであったし、開放的なフリースペースだったからこそ、気軽に足を運んで自分の意思やペースで過ごしてもらえたと思う。大人の数も決して多勢ではないからこそ、そこに過ごす若者たちが他の若者たちの安心感のある呼び水になっていた。

また、公園や広場という場所は、普段の生活の中に溶け込むと同時に、物思いにふけったりと一人にもなれたり、人のどんな感情も包み込んでくれる場所でもある。

そんな公園や広場の持つ魔法のような効果なのか、その場にいるスタッフへ心の内を話してくれたり、抱え込んでいる中の小さな一つをその場に置いていったりといった場面も生まれていた。そこに集う若者たちのすべての思いが、支援や相談につながったわけではない。むしろ、ほとんどに対して何のアクションも起きていない。

ただ、受け止める。ただ、ともに過ごす。そんな繰り返しに意味がある時間だったと思う。

色々反省点もあったが、自己選択、自己決定が保証された新たな取り組みとして今後の進化に期待したい。

名古屋市だから、委託事業者だからと分けて考えていくのではなく大人である私たち自身がともに考える意識をもつことも必要だろう。

ともあれ、やっている我々スタッフがとにかく「楽しい」と思える時間を過ごすことができたことが何よりも良かったと言える。

一般社団法人愛知PFS協会 代表理事

星野 智生(ほしの のりたか)



参加してくれたすべての皆様へ、心からありがとう

#久屋でチルする？を企画した経緯を教えてください。

今回、子ども・若者にとって、不安な気持ちが高まる夏休みの終わりから新学期の始めにかけて、のんびり過ごしたり、不安な気持ちに対して相談に乗れるように、子ども・若者が気軽に立ち寄れるフリースペースを開設しました。(山田)

#実際に子どもや若者とチルしてみてどう感じましたか。

実際に子ども・若者とチルしてみて、自分ものんびりまったり過ごせて、心が落ち着いたので、こういった屋外のオープンなスペースでくつろぎながら、一緒に時間を共にし、話を聞いてもらえるだけでも良いのかなと感じました。施設の中にある居場所だと、中に入るだけでも勇気がいると思うので、屋外のほうが気軽に立ち寄りやすいと感じました。(浅沼)

学校、家庭、友達関係や将来への不安など、様々な悩みを抱える子ども・若者。常に緊張した状態で生活している人もいます。今回のような「ほっと」できる場所や時間が、子ども・若者の心をほぐし、緊張感から少しでも開放される機会になっていればと思います。私も一緒にチルして「こうやってゆったりできる時間を意図的に作らないとなあ」と思いました。(国島)

#子どもや若者からいただいたアンケート(参加した感想)

はどのように生かされますか。

居場所事業については継続的に実施していく必要があるため、市として、今後何ができるのか、今回の「#久屋でチルする？」でいただいたご意見等を踏まえて考えていきたいと思っています。(山田)

#最後に一言！

今回、多くの方にご利用いただけて、子ども・若者の声を聞くことができ、従事して下さった運営スタッフの皆様には感謝申し上げます。今後も引き続き、子ども・若者支援の充実に努めてまいりたいと思います。(浅沼)

PFSの皆さんのおかげで、本当に素敵な空間を作り上げることができました。子ども・若者から「めっちゃくつろげました！」「心が落ち着きました」などの感想を聞くことができたのはPFSの皆さんのおかげです。今後も、子ども・若者の明るい未来のために、ともにがんばりましょう！(国島)



国島 邦博さん



浅沼 彩香さん



山田 宗典さん

ご協力ありがとうございました。広報誌チーム



SPECIAL THANKS

今回、支えてくれたすべての方へ

名古屋市 子ども青少年局
SNOW PEAK 久屋大通公園店
認定NPO法人 セカンドハーベスト名古屋
認定NPO法人 おてらおやつクラブ
一般社団法人 愛知子ども応援プロジェクト
松田 善行
(敬称略・順不同)



BRIGHT FUTURE

支援者って何者？

「支援者＝専門家」という認識も強いのではないかな。

私は支援者と専門家は全く別だと考えている。何らかのサービスや制度を作るために、専門家や行政は数字や仕組みを大切にする。これはとても大切なことで、そうすることでより効率的にアプローチできるサービスとなり得る。しかし支援者と呼ばれる人は「当事者の声からサービスを作る」ことを大切にしている。その根底には大人が地域が社会が手間暇かければ子どもや若者は必ず自分で歩んでいけると信じているからだ。今回の「#久屋でチルする？」は行政が専門家ではなく、私たち支援者と手を組み作り上げようとした取り組みだと思う。もちろんこれを施作として運用していくにあたっては、専門家の意見や知識も加味される必要はあると思うが、「当事者の声」を大切にしていく姿勢はここ最近多く見られるようになった。支援現場が次のステージに上がったのかもしれないと希望を持っている。介入しようとする離れていく子どもや若者の支援をどう考えていくのか…私たち支援者もこれまで以上に「声なき声」を大切にしていく意識が必要ではないかな。

一般社団法人 愛知PFS協会
代表理事 星野 智生

コラム

vol.3



PFSにかかわってくれている『若者』に聞いてみた PFSってどんなところ？

- #1. PFSのどの事業に関わったことがありますか？
- #2. PFSは関わる支援者さんや子ども、保護者にとってどんなところだと感じますか？
- #3. PFSの活動でも、それ以外でも今後やってみたいことや目指していることを教えてください。

鈴木 柚花さん

- #1. PFS学習会、よりそい訪問サポートなどや
- #2. 自分の頑張りや得意なこと、自分らしさを認めてもらえる場所だと思います。私は中学生の頃からPFS学習会に参加し、高校卒業後にサポーターになりました。中学生の時、頑張っても結果に繋がらないことが多く悩んでいた時がありました。その時に、頑張りを認めてくれて、「柚花らしいね」と声をかけてもらったことがとても嬉しく、自信に繋がりました。学校では結果に注目されますが、PFSでは結果のためにどうやったのか、なぜそうしたのかなど過程や理由に注目して関わってくれるところがとてもいいと思います！
- #3. 将来は一人ひとりと向き合う保育士になりたいです。自分が子どもだった頃、話を聞いて、助けてくれる大人がいたことでよかったなと思うことが何度もありました。なので、私も話を聞くことを大切にして、子どもや保護者と真剣に向き合い、困った時に頼れる大人になりたいと思っています。



竹村 春香さん

- #1. 名古屋みらい高等学院、事務局
- #2. 現状と将来に悩みや不安を持っている子ども・若者が、それぞれの道を歩む過程に、彼等の気持ちや考えに向き合う人々とコミュニティがあること。社会の中で、取りこぼされてしまうような状況にあっても、受け止められる方法があるのなら、何が出来るかを考える人がいる・意志を行動を示す人がいる。
PFSでは、このような活動を支援者のみなさんが取り組まれてきたことを見守ってきました。私自身は支援者ではありません。しかし、自身に不登校引きこもりの長期経験があり、社会とのつながりが希薄で希望を持ってない子ども時代に、声でも手でも、何かが差し伸べられていたなら……と振り返る事があります。PFSで支援者のみなさんが向き合われる姿勢に、差し出された手を握り返す子ども・若者たちの姿に、全肯定応援の気持ちを、子ども目線で抱いています。



小塚 翔斗さん

- #1. PFS学習会、あしたネ。
- #2. 自学舎であり第二の家のようなところだと思います。友達というわけでもなく親や先生というわけでもないで友達に言えない相談事であったり保護者との小さなトラブルのようなことも程よい距離感で相談に乗ることができる場所だと感じます。
- #3. 私は、高校の非常勤講師をやりながら学習サポーターをしていて自分自身が多くの利用者の子どもたちと関わっていると1人ひとりがいろいろな考え方、捉え方感じ方をしていてまさに十人十色だと感じました。なのでこの活動を通して体感したことを役立てる教員になりたいと思いました。子どもや生徒と関わる時に模範解答はなく1人ひとりにあったそれぞれ違う指導や関わり方があると思うので様々な指導、関わり方ができるようになりたいです。



今泉 翔太さん

- #1. PFS学習会、よりそい訪問サポートなどや、あしたネ。、みらいe。
- #2. PFSは子どもにとって学校でも家でもない居場所だと思います。学校や家に居場所がない時に僕はPFSに出会いました。PFSでは先生や親とは異なる大人との関わりや、年齢の異なる人との関わりを持つことが出来ました。これまで関わったことのない人との関わりは自分の新たな一面を覗ききっかけになりました。PFSは学校や家でいづらなくなった時に、安心して、人との関わりを持つことの出来る居場所になってくれます。
- #3. 僕はいま、人工衛星が欲しいです。人工衛星が個人で購入することができるものなのか、どれくらいするものなのか、どこに問い合わせればいいのか全く分かりませんが、最近宇宙に興味を持っているので僕が死ぬまでにどうにか僕と宇宙との繋がりをもちたいと考えています。今はその手段が人工衛星が欲しいというものです。まだ60年ぐらいは生きるつもりなので、人工衛星は購入できる時代になると嬉しいです。

